ドクター寺田の

学内遊学

編集長　寺田　員人

2001年10月16日・17日
佐渡の取材を終えて。

佐渡演習林

# フィールド全てが、教材

## フィールドそのものが実験、実習の施設であり、自然とつきあう場であると感じた。

**サスティナブルであるためには、経済的な関心もさることながら、場所に基盤を置いた人間にならなくてはならない。**

ゲーリー・スナイダー
現代アメリカの代表的詩人。一九三〇年生まれ。「場所の感覚」「バイオリージョナブル（生態地域主義）」をテーマに、「場所の文学」で人間とノンヒューマンの新たな関係性を結ぶコミュニティの夢を語る。

夏の賑わいが過ぎた静かな秋の午後に佐渡航路のカーフェリーの中で、佐渡にある大学附属施設を取材した反省会を行っていた。

日頃、大学の構内にある研究室、教室、実習室で授業を行っている私にとっては、佐渡にある附属施設で見聞きしたことは、新鮮であり感銘を受けた。

臨海実験所では、研究所で施設の概要をお聞きした後に、小さな入り江を介して直接日本海の外洋に面している達者湾を実習船IBIS 2000に乗りながらお話を聞いた。沖で採取された海洋生物を特性のコンテナで運ぶことで遠く離れた実験施設でも実験や実習が行える。しかしその生物が生息している環境を肌で感じて実験を行うことで充実感を抱き、着想を広げることもできるだろう。沖で採取した生物の中には偶然に捕獲されたものもあるだろう。捕獲された生物の名前を探す楽しみ、それが珍しいものであれば命名する喜びも加わる。施設での説明以上に、実習船上での野崎眞澄所長の眼が輝いていたのが印象に残った。

農学部佐渡ステーションでは、ステーション

達者湾。附属臨海実験所の実習船IBIS2000

佐渡ステーションにて、
採取した昆虫を見せてくれる。

演習林を車で登っていく。取材班のひとりは
サファリラリーのようだと大袈裟に叫んだ。

技官の矢部茂明さん
ご協力に感謝。

のある小田から大倉川沿いに山道を通り、山毛欅ガ平山（ぶなガひらやま）の南の大倉越を通り北松ヶ崎に至る道を車で案内して頂いた。

４月の下旬、山道の補修から１年が始まる。学生の実習の始まりが鉈の刃を研ぐことであると聞いた。どちらも演習林実習ならではと思った。佐渡ステーションの近くにはコンビニはない。また、演習林に入れば携帯電話も届かないことだろう。そんな不自由な環境に学生がついていけるか疑問に思った。しかし、実習を終えた記念撮影で写った満足感がこの解答であった。演習林には、天然スギ、シャクナゲ、カタクリ、雪割草の群落などの植物系、鮎の生息する川、昆虫、放牧された牛（地元の牧畜）などの動物系、そして海抜0mから900mに至る地形、木々の生い茂る地形、風の強い急斜面、砂防ダムなど各種の地形・地質系、椎茸の栽培など演習林全てが教材である。同時に、山道は人が通らなければ藪になり消えてしまい、春に行う補修は除雪、石の除去などであり、すばらしい演習林を守ることの苦労も伝わってきた。

佐渡からの帰路、カーフェリー内で編集会議

このような理学部臨海研究所、農学部佐渡ステーションは、それぞれの学部に限った施設ではなく、他学部、他大学の学生も利用している。今回、東大の学生が演習林で日中採取した昆虫を夜、仕分けしていた。この施設の良さが他大学にも広まっていることを認識できた。

達者湾や演習林は佐渡の人たちに支えられている。同時に、施設では公開講座などを行って佐渡の人たちが住んでいるところの良さを教えている。住民と施設の交流も盛んに行い、共存している様子も知ることができた。フィールドそのものが、実験、実習の施設であり、自然とつきあう場であると感じた。自然や環境を扱うには欠かせない施設であり、生涯研修の場になるものと思った。

前日より一転した雨の中、山道を運転していただいた矢部茂明さんに感謝すると共に、雨が再度の訪問を誘惑するものであった。

佐渡演習林